



CIF JAPAN

NEWSLETTER No. 55

・<https://cif-japan.com/>



・cifjapan08@gmail.com

Council of International Fellowship Japan

発行人:NPO 法人 CIF ジャパン理事長 坂岡隆司

編集人:加納光子 発行日 2025 年 10 月 1 日

事務局:〒607-8216

京都市山科区勤修寺東出町 75 からしだね館

Tel. 075-574-2800

Fax. 075-574-0025

目次	巻頭言	江口敏一	1 頁
	CIF INTERNATIONAL の動き	浅野純江	2 頁
	職員インド研修	三宅 浩	4 頁
	ソーシャルワークの仕事に支えられて	隼子 F. Nandi	5 頁

巻 頭 言

～確かな福祉実践の方向性を求めて～

副理事長 江口敏一
(1983 年 ツインシティー)

人は想定外の人生の出来事に直面するとき、自分の思いで生きてきたとの考えが全く覆され、生も死も、誕生を含め、生かされ・導かれていると確信せざるを得ない。

児童福祉に導かれて 17 年目になる私に、「神様の栄光をあらわすとはどのようにすることか」が常に問われている。

この施設は、第二次世界大戦後、米兵との間で誕生した混血児の支援に対し、キャサリン・スティーブンス宣教師の献金と別府不老町教会の野町良夫牧師の合意で法人が設立され、今年で 75 年になる。事業は信仰熱心な教会員の小郷虎市・小福夫妻が担う形で展開された。虎市は施設建設直後の漏電事故で焼失した施設再建で落命された。以後、小郷小福は懸命の努力を重ね、神様の栄光を現わす道を求め続けてきた。

人助けとして為すべき隣人愛は、聖書のルカによる福音書 10 章 25～37 節「善いサマリア人」の例えとして具体的に示されている。

その手順は、①助けを必要としている人に気付く、②その人に心を向け近づく、③持てる専門性を使って必要な傷の手当てをする、④自分の口バを用い、その人のために宿屋への道をたどる、⑤必要な金銭を提供し、⑥最後まで責任を持つ。

時と場所に依じてこのような実践をすることこそ隣人愛であると聖書は告げている。自分にはこのことができるであろうか。実践できる理念の構築(自分の生き方の基本)が試される。

この支援の具体的な内容は、支援の対象(相手)が誰であろうと自分と全く価値観が異なる人であろうと、その人が必要とあれば、自分の時間・才能・財力を用いること、たとえ、自分の人生が終ろうとも用い尽くすことと考える。

なぜそのように考えることができるか。それは実際、誕生の際にはこれら時間・才能・財力は何も持たずに生まれてくる。今持っている時間・才能・財力は与えられたものであり、愛の実践のために用いるためであると認識せざるを得ない。実際、これらは、自分の人生を終わる時には何一つあの世に持って行くことはできない。生きている間に、与えられている時間・才能・財力を惜しみなく使うことこそ私たちの充実した人生と言えるのではないか。そして、それこそが神様が私に与えられた愛への応答ではないかと思えてくる。

時代は、核家族化と少子高齢化の対策が功をなさず、夫婦と子の世帯は減少し、単身世帯と高齢者単身世帯の増加は留まるところを知らない。すなわち、支援の必要な一人暮らしの増加対策としての居場所づくりは、幼少生に限らず、支援を必要としている青少年、高齢者、幼い子と暮らす母子・父子世帯など福祉ニーズは多岐にわたる。施設型から地域型へ、複数の方たちから一人ひとりの支援へと積極的に取り組んでいかなければならない(個人情報保護のもとで相手が誰だかわからず

とも)。

今こそ、しっかりした経営理念のもと、神様が私たちに与えられた愛の実践の時間が留まることなく押し寄せてきているのを実感する。

「善いサマリア人」ルカによる福音書 10 章 25～37 節

ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

CIF INTERNATIONAL の動き

IPEP (国際プロフェッショナル・エクスチェンジ・プログラム)

2025 年については、10 月 1 日時点で、以下の国で実施中もしくは実施予定です。

国	日程	期間	締切り	言語	費用	人数
FRANCE	9/23-10/18	24 日	1/15/2025	仏語	no fee	3-6
ITALY	9/20-10/5	2 週	3/1/2025	英語	300 Euro s	up to 4
NEPAL	11/26-12/16	3 週	9/15/2025	英語	500 Euro s	3-5

◇ IPEP が提供する機会

- ソーシャルワークの実践を観察し、議論し、可能であれば参加する機会
- アイデア、価値観、経験を、同様の配置にある多国籍の仲間の専門家グループと共有する機会
- 地元の家族と一緒に生活し、彼らの文化や生活様式を知る機会

◇ 参加資格

- ソーシャルワーク、社会福祉、または福祉分野/関連分野の教育的背景を持ち、これらの分野で少なくとも 2 年間の専門的な経験を持っていること
- IPEP プログラムの言語を用いることができること

カンファレンス

浅野純江

(1996 年 フランス)

第 36 回 CIF 国際会議のご案内

期間: 2025 年 11 月 9 日(日)～13 日(木)

開催地: インド ムンバイ市 (タタ社会科学学院)

テーマ: 「変わりゆく世界・国際関係のあり方を考えるー ソーシャルワーク発展の道」

International Relations in A Changing World: Way Forward for Social Work

日程

EC 会議: 11 月 5 日と 2025 年 11 月 6 日

BD 会議: 11 月 7 日から 11 月 9 日 12PM

会議: 11 月 9 日から 2025 年 11 月 13 日

会議後ツアー: 11 月 14 日から 11 月 19 日

会議会場: タタ社会科学研究所 - (TISS)

住所: VN Purav Marg, Deonar, Chembur,

アジア地域で CIF 国際会議を開催

CIF (Council of International Fellowship) は来る 11 月、第 36 回 CIF 国際会議をインド、ムンバイ市で開催します。CIF は 1964 年の設立以来 2 年に 1 回、世界の社会福祉関連分野の従事者が集い情報交換、経験交流を重ねてきました。現在 30 か国に支部があり、本年の会議は久しぶりのアジア地域開催です。CIF インド支部とムンバイ市にあるタタ社会科学学院ならびに社会

事業大学の協力を得ておこなわれます。2020年に予定されていましたがコロナ禍のため延期されこのたび満を持しての開催となりました。インドで開催されるのは1980年、2003年に続いて3回目。これまで「米国CIFプログラム」、「CIF国際交流プログラム」に参加してきた往年のメンバー諸氏の力強い後押しと協力があり、CIFインド支部役員会ならびに関係者が一丸となって会議参加者を迎える準備に全力を注いでいます。

会議のテーマ

国際会議を招聘することが決まってから、CIFインド支部は専門家等による国際会議組織チームを立ち上げ、会議内容や構成について詳細にわたる討議をおこなってきたそうです。その結果をCIFワールドニュース2025年春号でつぎのように発表しました。



21世紀の世界は急速に著しい変化を続けている。たとえばグローバル化やデジタル化、環境の悪化や移民の増加、頻発する紛争など多数が挙げられる。こうした急激な変化により、世界中に新しい可能性や発展の機会が生み出される一方、さまざまな形の人権侵害が引き起こされている。社会正義や人間の尊厳、個人・グループ・コミュニティのウェルビーイングの推進を専門とするソーシャルワークは、今、そうした“変化への新たな挑戦”が求められている。われわれはこのように激変する世界で絶え間なく発生する緊急のニーズを捉えて即対応し、改善を進めていかなければならない。さまざまな社会的な課題は、今や単独で解決できるものではなく、国境を越えた対応を必要としている。あるところで発生したできごとが世界の他の場所にもただちに大きな影響を与える世界に生きていることを、われわれは自覚しなければならない。“変わりゆく世界を国際的な視点で捉え、相互関係のあり方を考える”ためには、人間の多様性や人類が経験してきたこと、現在経験していることの複雑さに気づくことが重要なのだ。そこで次の2点を目的として協議をおこなうこととしたい。

1. 歴史、政治、経済、文化などについてグローバルな視点で観察し危機意識をもつ。
そこから社会的諸問題の原因とその結果として生じたこと、社会政策や調停・干渉の力の可能性と限界が見えてくる。

2. 異なる地域や他の学問領域の専門家と協働でネットワークを構築する。
意見、知識、技術、資源などの交換により、異文化社会にあって互いの利益を擁護しあう関係になる。共同で解決策を導き出せば文化的にも適切な、参加型の持続可能な社会が生まれる。

以上のようなコンセプトをもとに会議のテーマを「変わりゆく世界・国際関係のあり方を考えるーソーシャルワーク発展の道」とし、ソーシャルワーク専門職のみなさんに“変化への新たな挑戦”を呼びかける。人間のウェルビーイングに影響を及ぼす問題はどれも複合的でそれぞれに関連し合っている。一緒に考えることにより、挑戦する力を得、より平和な、包摂された、持続可能な世界の発展に貢献することができる。それらは人権や社会的連帯、地球市民権の価値を育むことになるだろう。
(第36回 CIF 国際会議組織チーム)

国際会議では、基調講演、サブテーマ別の分科会などが行われるほか、社会福祉施設訪問、ヨガや歴史遺産見学などの文化行事、会議後にはケララ州、デリーとジャイプール、ゴア州などへのオプションツアーも企画されています。

ムンバイ市があるマハラシュトラ州の11月の気候は、乾季に入り旅行シーズンとなります。わたくしにとってインドは過去3回ほど訪れたことのある思い出のある国です。世界中からたくさんの方が参加され独特の文化を経験して相互理解を深められますようお願いしています。

会議登録は

<https://forms.gle/9mjSh8BTbg92BuM77>

または

<https://cifinternational.com/uploads/conferences>



夜の大屋根リング@大阪・関西万博

今、思っていること・感じること

職員インド研修

—言葉が通じなくても—

三宅 浩
(2004 年 カラマズー)

私たちの事業所では、知的や精神に障がいのある方たちの支援を行っています。日本の社会が多様化、複雑化していく中で障がい者を取り巻く社会状況も大きく変化し、それに伴い本人や家族が私たち支援者へ求めるものも多種多様になってきています。

法人としては、職員の専門性向上、知識、技能の取得のための研修についてはこれまでも施設内外で積極的に実施してきました。結果、他の事業所が敬遠する困難な障がい事例にも臆せず受け入れる体制は出来上がってきたように考えています。

しかしながら、福祉の専門性の追求は進むものの、それを扱う人間性を豊かにする視点が近年希薄になってきている部分はあると感じています。社会福祉の分野が専門化、高度化してくるに伴い、これまで先人たちが大切にしてきたヒューマニズムが失われてきている現状を感じています。今後は人間力を高め、福祉施設だけでなく広く社会で通用する職員育成の強化にも目を向けていく必要があると考え、CIF-Japan メンバーのナンディ藤本さんや私が若い頃インド滞在中お世話になった方々を頼り、職員の研修を受け入れてもらっています。

派遣する職員には初めて海外へ出る者、英語もほぼ話せない者もいます。

研修先 ① デリー（ナンディ藤本さんからインド社会等についてレクチャーしていただきました。

② ムンバイ（CIF INDIA の方が代表を務めるSUADHA という農村部の開発を支援する NGO 団体）

③ マンガロール（カトリック教会が運営する障がい者のグループホーム）

今年は2月に2名の女性職員を約4週間インドに派遣しました。デリー、ムンバイ、マンガロール（カルナタカ州）とその間の移動は列車のみで約3,000kmを旅してきました。その時の報告書を一部抜粋して紹介します。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

実際に自身が言語の異なる環境に長時間身をおい

て、どんなことを感じられるのか実際に体験して知りたいと興味を持ちました。初めての場所で言葉が通じない方と接する環境で新しい気付きを得るために貴重な機会と思いインド研修の参加を希望しました。

ナンディさんからは、インド社会のことだけでなく、海外から見た日本人のこと、日本社会のことなど熱く語っていただきました。言葉に不安を持っていた私は、『英語はただ話すことに意味はなく、相手に伝わる意味のあることを話さなくてはコミュニケーションにはならない。どういった話をするのか、その人に合わせた言語を選択してコミュニケーションを使い分けること。そうすることで、受け取る側の想いが変わり配慮や思いやりに繋がっていく。私たちの仕事はプロフェッショナルで飽きない仕事である。』と伺い、私たちの仕事は素晴らしい仕事だと言ってくれたことが嬉しく、仕事に誇りを持っていいのだと再認識することができました。

一つ目の研修先はムンバイにある「SUADHA」という辺境の地にある村や学校などに寄付や物資の支援などを行っている NGO 団体。重度障がい者が暮らすグループホームや支援している農村部を訪問しました。私の拙い英語力では会話が長く続かず、申し訳なさや孤立感で落ち込んでいると、スタッフの方が優しくハグしてくださいました。日本では馴染みがなく緊張しましたが、他人との直接的な触れ合いに人の優しさを肌で感じて心が満たされるような温かさを感じました。

二か所目の研修先はカルナタカ州マンガロールのカトリック教会が運営する女性のみの障がい者グループホーム。シスターの方々が障がい者と共同生活されています。そこで出会ったソーシャルワーカーの女性とインドと日本の文化の違いについて話をしました。その中で彼女は、『日本人は働きたいと思えばすぐに働くことができる。』と笑っていました。その時、勉強や知識を得る努力をせずとも働くことができる日本の現状に甘えて私たちは努力することを怠っていることに気づきました。

今回の研修を通じて、たくさんの人と出会い、日本では体験できない出来事ばかりでしたが、貧富の差がある中でもそれぞれが努力して生きている彼らを見て、自分自身の知識の浅さを自覚し、世界を知り学ぶことの大切さを痛感しました。言語の異なる中で、視覚的に理解できたことやジェスチャーや拙い英語でもコミュニケーションを交わせた時の楽しさや喜びは、日本やインドという国を超えた人との繋がりを感じることでできた貴重な時間となりました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆



ソーシャルワークの仕事にささえられて
人生を何とか生きぬいてきた私

Itsuko F. Nandi
(1975 年 コロンバス)

長く生きてきた私の人生を振り返ってみたいと思います。1973 年、CIP プログラムに参加してから 50 年以上過ぎました。当時、私は社会福祉の世界でソーシャルワーカー (SWr) として働き始めていました。慈善事業から社会福祉事業へ移行する時代でもあり SWr として新しい世界に興味深々でした。社会福祉の世界で専門職としての SWr という言葉は私にとってまるでパイオニアの気分にさせる響きがありました。慈善事業から社会福祉事業へと変化したこの世界は新しい試みができる機会が山ほどありました。

厚生省 (現厚生労働省) や、社会福祉の全国組織などの協力なネットワークがあり、また社会福祉の学会や海外研修の実施等多くの SWr の専門性を高めるための社会資源がたくさん用意されていました。若い私にとっては多くの可能性を提供されているようで、現場の厳しい仕事も耐えることができました。戦前の社会福祉の仕事のあり方と私たちが考える社会福祉のあり方には大きなずれがあり、いたるところで対立する羽目にあいました。でも、ネットワークがしっかり構築されていたので、情報交換ができ、全国の SWr と支えあうことができました。苦労も多かったけれど人として仲間を大切に思い、支えあって日本の社会福祉が充実されるように頑張っていました。今思うと、かなりの冒険心で新しい試みに挑戦しました。現場を離れて半世紀が過ぎようとしています、今でも当時のあの向こう見ずの情熱が懐かしく思われます。

この文章が目に残った若い SWr の人たちへ贈りたい言葉は、「時間は止めることができないので、今置かれているその場所でのあなたが最善と思う行動を起こしてください。それに、どんな人にも尊厳があることを忘れないください」ということです。また、「人は一人では生きていくのは難しいです。努力して多くの愛することのできる友人・知人をたくさん作ってください。そうすれば、老人になってもこれらの人々との交わりが生きるための最善の贈り物と変化します。」ということです。これらの言葉を自信をもってお伝えします。

最後に、いつも話していますが、オレンドルフ博士が CIP の参加者に話していた言葉「あなたが受けた好意 はその人に返せなくても、あなたの身近で助けを必要としている人に返してあげましょう。」を私の文章の終わりとします。

2025 年度 CIF 総会報告

日時: 2025 年 6 月 28 日 (土)

13:00 ~ 14:00

実施方法: オンライン (ZOOM)

◆ 6 月 28 日 (土)、今年度の定期総会がオンラインで開催されました。

出席者は 8 名、それに委任状又は議決権行使書提出者が 10 名でした。出席と委任状等の合計数は 18。総会の定足数は会員総数 32 名の過半数ですので 16 名ギリギリでしたが、何とか会議成立しました。

◆ 議案は、次の 5 件でした。

- ①2024年度事業報告
- ②2024年度決算報告
- ③監事監査報告
- ④2025年度事業計画
- ⑤2025年度活動予算

ニュースレターの発行を年に一回、9月1日とし、後は必要に応じて発行することになりました。この件以外は基本的にすべて原案通り承認されました。なお、事業計画、秋の研修会（講演会）については、三宅浩氏（CIF ジャパン副理事長、2004, Kalamazoo）を講師として開催することとなりました。

CIF 秋の講演会ご案内

テーマ：「インドで考えたこと—海外研修のお勧め—」
講師：三宅浩氏

NPO 法人 CIF ジャパン副理事長
NPO 法人暖家理事長

CIF (Council of International Fellowship) ジャパンでは、社会福祉や対人援助分野で活躍するワーカーや研究者を対象に、世界各国の CIF が主催する国際交流研修プログラムへの参加希望者を募集しています。今回の講師は、このプログラムのかつての参加者であり、福祉事業の現場で日々汗を流しつつ、国際的な視野で物事を見ていくことの大切さを語り続けています。当日は、海外研修についての最新情報もお知らせする予定です。

日時：2025 年 11 月 1 日（土）

午後1時半～3時

ZOOM によるオンラインで開催

参加費：無料

申込：10 月 25 日までに、NPO 法人 CIF ジャパン事務局までメールでお願いします。

thomas@karashidane.or.jp（坂岡）

主催：NPO 法人 CIF ジャパン



編集後記

ニュースレター第 55 号をお送りします。今回もご投稿は少なかったのですが、三宅さんの事業所の職員の方の素晴らしいインド研修と、その研修にインド在住のナンディさんが協力されている様子のわかるご寄稿があり、心温まる気がいたしました。

ナンディさんは、音声を変換するアプリを使って話された事柄を文字化してご寄稿くださいました。皆様の中でも書くことよりも話す方が楽だという方がおられましたら、音声だけでもお送りいただければ、文字化は編集部でアプリを使っていますので、ご遠慮なくご投稿ください。

なお、AI によりますと一音声文字起こしアプリには、Google の「音声文字変換>>」(Android)や「Google ドキュメント」(PC・Web)、「Notta」や「AutoMemo」など、無料または無料プランがあるものが多くあります—ということです。

最後になりましたが、御多忙の中、ご寄稿いただきました皆様に御礼申しあげます。

<文責 加納光子>

<ニュースレター編集部>

cifjapannews2022k@gmail.com

ニュースレターに関しましてご意見がありましたら上記
アドレスまでご連絡ください。

<CIF-JAPAN 事務局>

cifjapan08@gmail.com

Tel. 075-574-2800

CIF ジャパンの活動や IPEP に関するお問い合わせは、
CIF-ジャパン事務局の上記アドレスに、メールまたは電
話でお問合せください。

<CIF ジャパン> <https://cif-japan.com>



<CIF インターナショナル>

<https://cifinternational.com/programs>



《会費納入のお願い》 年会費 3,000 円

口座名義: 特定非営利活動法人

CIFジャパン

他金融機関から

【店名】四四八（読み ヨンヨンハチ）

【店番】4 4 8

【預金種目】普通預金

【口座番号】5 4 5 1 9 7 3

郵便局から

【記号】14400

【番号】54519731

【名前】トクビ シーアイエフジャパン

郵便振替

【記号と番号】00900-4-0326750

【加入者】特定非営利活動法人

CIF ジャパン

をご利用ください。